

世界の終りは2012年の終り

加藤 佳奈子

今月に入ってまず耳にしたのは「世界最後の日（中国語では世界末日）」というなんだか心穏やかではない言葉でした。よくよく聞いてみると、それは中央アメリカの古代マヤ暦で2012年の12月21日に世界の終りがやってくる、という『2012』というアメリカ映画から広まった噂でした。驚いたことにこの噂は冗談とも本気とも取れるような語気で語られることが多く、「世界の終りがそろそろやってきますからね」というような言葉がいろいろな媒体で使われていました。ちなみにあるラジオ番組を聴いていたところ、レポーターが海外でのこの噂の反応を聞きまわっていて、日本人はまったく世界の終りを信じていない、という結果がでていました。当たり前といえば当たり前のような気がしますが、12月の中国ではことあるごとに「マヤ暦」や「世界の終り」の特集が組まれているのを見かけました。

そんな今月の半ば、学校の校門前のブックスタンドで1冊の旅行雑誌を購入しました。タイトルはもちろん「マヤー2012年の熱狂ー」。現在のメキシコ、グアテマラ、ホンジュラスに残る古代マヤの遺跡とマヤ文化を受け継ぐ末裔たちを知る、というような特集で、古代ピラミッドの解説や現地の人々の暮らしぶりが紹介されていたのですが、予期せず、懐かしい風景に行きあたりました。それは今年7月下旬まで私が滞在していたグアテマラのとある町のもので、見開きページで目に飛び込んできた写真は私の下宿していた家に隣接する修道院跡地でした。文字通りの“隣”なので、どこへ出かけるにもその修道院前を通っていた毎日が鮮明によみがえり、中国にいながら雑誌を通してグアテマラの日々を思い出すなんて、と感慨深かったです。中国語で書かれた雑誌ですが、グアテマラで下宿していた家のお母さんにも1冊、注釈をつけて送るつもりです。最近では中国での生活に忙しく、グアテマラでお世話になっていた人たちとも連絡をとる機会がなかったので、今回は機嫌うかがいのいい口実になりそうです。

さて話は中国に戻りますが、「世界の終り」が過ぎた太原の街はすっかりクリスマスモードに切り替わり、サンタクロースが商店街でさかんに飾り付けられ、山のようなリンゴが売り出されてきました。なぜリンゴか、というと、中国ではクリスマスイブにリンゴを食べる習慣があるからなのです。かわいい小箱に収まったリンゴを友達や恋人に渡すのが一般的らしいのですが、私はリン

ゴよりはお菓子のほうがもらってうれしいなと思ったので、小さいお菓子をいくつか千代紙で包んで配りました。日本人留学生、また他国の留学生からはおむね好評だったと思いますが、中国人の友達に渡したところ、少し複雑な表情でお礼を言われてしまいました。理由を聞いてみると、それはお菓子の数が4つだったから、ということで、4という数字は中国でも「死」を連想させるので特に贈り物をするときには避けるべき数字だということでした。ちなみに書籍をプレゼントするのも良くないそうです。そのような習慣について聞いたことはあったのに、私自身まったく意識していなかったのでびっくりしたのと同時に申し訳なく思いました。表面的には中国の暮らしに慣れてきたかな、と感じていましたが、まだまだ知らないことや勉強しなければいけないことがたくさんありそうです。

中国は旧暦で正月を祝うので、12月の末もまだまだいつもと変わらない日々、といった感じですが日本では今年ももう終わりです。やり残したことをできるだけ少なくして新たな年を迎えたいと思います。



これがクリスマスに食べるリンゴです。一般のリンゴより割高。



雪の降る日もありますが、基本的には晴れが多いです。
特にこの日はキリッとした青空が気持ち良かったです。



市の中心にほど近い古いお寺。
600年以上前の建物で珍しく木で組まれた堂がありました。



散歩中に見つけた旧市街の一角。
レンガ造りの家はなんだかヨーロッパのような風情があります。